
時限突破旅行伝

あやふやなる事あの夏の夢が如く

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時限突破旅行伝

【Nコード】

N2528I

【作者名】

あやふやなる事あの夏の夢が如く

【あらすじ】

とある事件から剣を捨てることにした倉羽宗助は中二病感染者の友人秋坂光輝と共に異世界へ送られてしまった。世界を救うような英雄になると宣言する友人に巻き込まれ異世界であらゆる騒動に巻き込まれていく。学生である身の宗助は留年を回避するためにも三ヶ月が最低リミット。

果たして秋坂と宗助は三ヶ月の間に世界を救い元の世界に帰ることが出来るのだろうか？それとも小説の題名のように時限突破の方法を考えるはめになるのだろうか？

全ては作者の気分にかかっている。

今ここに時限突破モノ異世界伝が誕生する。

となっていく予定です。

ブログ・チュートリアル戦闘・俺が不幸なのはこいつが隣にいるからか？

一週間に一度更新していけたらと思います。拙い作品ですがどうぞ
気長にお付き合いくださいませ。

ブローグ・チュートリアル戦闘・俺が不幸なのはこいつが隣にいるからか？

「いやー、森って良いよな。都会暮らしで汚れたこの身に澄んだ空気が染み渡るぜ！」

我が友人。名を秋坂^{あきさか}光輝^{ひかり}という。相変わらず能天気で無計画なことこの上ない。

そして今辺りは見渡す限り森だ。しかもうつそうと茂っていて薄暗い、間違ってもレジャースポットではない。迷ったら生きて帰って来れないっていうタイプの森だ。

「いいな、お前は楽しそうで俺は現実逃避したい。これが夢だと思いたい。」

「俺は現実であってほしいな。」

「何故だ？」

「だって現実なら、俺達テレポーションか異世界に召還されたって事だぜ、リアルに。」

それで困っているんだろうが！と突っ込みたかったがこんなところで叫んで何が飛び出してくるか分かったもんじゃない。下手したらこのまま死ぬんじゃないだろうか。

冷静に考えよう。白川高校へ登校中、秋坂が前から走ってきて、ぶつかって、気がついたらここにいたと……だから俺にどうしろと？

「そういえば森に着たからには一つやることがある。」

「何だ？」

「ふっふっふ。それはヤッホーと叫ぶことだああ……！」

「それは山だろっ……！」

っは、つい全力で突っ込んでしまった。

「グルアアアア……！」

「テレッテッテー森の熊さんが現れた。」

「ナレーションしてる場合か。逃げるぞ。」

ていうかあれ熊さんか、角ついてんだけど。

「いや、ゲーム開始初めの戦闘チュートリアルで逃げるコマンドは選択できんだろ。」

「だったらスライム出せや、システムバグかよ。」

「これは何のRPG?」

「Dクエ?」

「返さなくて良いからー!」

「つとこんなことしてる場「ガアアアア!」」「うおおおお」森の熊さんが俺に向かって引つかいてきたのを何とか避けることができたのは良いんだが、後ろにあった大木にすごい傷がついてる。もう、挟られてる感じ。あれ食らったら普通に死ねるよな……

「秋坂、俺逃げていい?」

「安心しろ、次はこっちのターン。一撃で決めるぜ。」

「そついうと秋坂は一步前に踏み出た。」

「心・廻・塵（かいしんじん）『装威天空漸』」

秋坂の体が霞んだかと思うと一瞬で獲物の心臓部を貫いていた。

よく見ると貫いた周りの肉は炭化していて血も出ていない。

「ざつとこんなもんか。」

「いや、強いとは知ってたけど。人間やめてるほどだとは知らなかった。」

しかし、戦闘チュートリアルで森の熊さんもどうかと思うがいきなり必殺技はありなのか?でもそういう設定がある奴とか必殺技を使ってみましようつていうチュートもあるしいのか。つていうかこれげーむじゃねえ!

「さて、危機も去ったところでこれからどうするか一度冷静になつて考えてみるか。」

「いや、考えるべきはそこじゃないだろ。」

「これを欠いて何を考えると?」

「普通異世界迷い込み系の何たらつていうところいう奴に遭遇した時は、大抵今後ヒロインになりそうなキャラと遭遇し共闘しなん

だかんだで近くの町まで送ってもらい最終的にギルドとかでチームを組もうみたいな感じになるだろう？今は何故このような展開にならないのか考えるべきだと。」

「自分がフィクション並みのスペック持つてるからといってフィクションみたいに考えんじゃねえ。第一お前かなりチートくさいし。シリアス系のファンタジーだったらストーリー破綻する。」

仮にこの世界がフィクションだったとして、秋坂みたいなスペックの高い奴の近くにいたせいで俺巻き込まれたんじやなかるうか？

「キヤアアア！！！」

「その時西の方角から悲鳴が聞こえたのだった。二人は西に向かつて駆け出すのであった。序章・了」

「だから、ナレーション сенでいい。それより何が了？」

「チュートが終わったって事は章の変わり目だよ。それからどうやらこれは美少女が死にそうになっているところを助けるタイプだったんだな。全く無駄な運動をした。」

何でもいいが俺達は悲鳴の聞こえたほうへ向かうことにした。

ブローグ・チュートリアル戦闘・俺が不幸なのはこいつが隣にいるからか？

いかがでしたか。感想お待ちしております。ついでに方向性がおかしくなった時に文句を言っていただければ幸いです。

第一章・第一部・やっぱりこ都合主義ファンタジー世界か（前書き）

テンプレ的な展開は速めに終わらせようと思うので、若干更新スピードはやめます。

第一章・第一部・やっぱりご都合主義ファンタジー世界か

駆けつけてみたのは良いものの。確かにいたよ十四、五歳ぐらいの少女が、森の熊さん十匹ぐらいに囲まれてたがな……無理じゃね。

「よし、秋坂ここは落ち着いて考える。とりあえずここはどうにかして森の熊さん達の気を引く、そのうちに何とか少女を連れて逃げる。この作戦で行こう。」

そもそもなんで熊が群れているんだろうか？

「かつこ悪いじゃんかそんなの。ここは真正面から勝負を挑もうじゃないか!!」

分かっていたさ、こいつがこんな奴だって事はな。

「じゃあ行こうぜ!!!!」

「ちよ、待て飛び出すにしてもタイミングが」

あゝあ。仕方が無い。まあ、何とかなるかあいつ異常だし。というわけで俺も飛び出す。

女の子を庇うようにして俺達二人は立つと秋坂は叫んだ。

「正義の味方参上!!!!!!」

一瞬空気が止まった。

おい、そんな恥ずかしい台詞普通いうか？森の熊さん達もなんかたじろいであるし、頼むせめて少女には言葉は通じていないでくれ、でもそうなるした後々大変だよな。でもこいつと同類に思われるとか絶対いやだ。

「覚悟しろ。先制攻撃だ。」

俺の悩みを無視して秋坂は攻撃宣言をした。

そして秋坂は一歩前に出ると腰を落とし両腕を脇に構えた。ちよっと待てこの構えはもしや……

かいほうせんぶうきやく
「廻奉閃風脚！！！！」

この状況で全範囲攻撃だと！まずい俺も少女も攻撃範囲内じゃないか。

「くつ、間に合え。」

なりふり構っていられる暇は無い。

「きやつ」

俺は咄嗟に少女に跳びかかるようにして押し倒し、地面にうつ伏せになるように身を屈めた。

秋坂を中心として発生した旋風は森の熊さん達を切りつけてなお勢いは弱まらず辺りの大木までなぎ倒して円形の広場を作った。

「終わったか。」

しかし俺はそこで重大なことを思い出した。少女に抱きつくようにして倒れこんだため今非常に密着した状態にある、女の子と。

自分はここまで瞬発力が高かったのかと思うようなすごい勢いで俺は飛び退いた。そしてとりあえず今自分にできることを百通りぐらい思い浮かべてから素直に謝ることを選択した。

「本当にすまん。悪気は無かったんだ。」

親にもこんなに真剣に誤ったことは無いぞ。

「え、ええええつと。あの、助けていただいたわけですから。べ、別に気にしていませんよ。あの、えつと。と、とにかく大丈夫です。」

真つ赤な顔で慌ててる金髪美少女は全く大丈夫じゃなさそうに言ってくれた。

所でこれから何すればいいんだ？こういう事態には慣れていないので次の言葉が思い浮かばない。二の句がつけないとはこういうことだったのか。先生ようやく理解できました。

そこに関しては向こうの同じようで、服の裾をもじもじといじりながら無言でこちらの顔を何度もちら見してくれた。

気まずい沈黙の中頭真つ白というのはどうにも耐え切れなかったので、とりあえず落ち着いてみることにした。

慌てて良く分からなかったが改めてみると目の前の少女は美女だった。あほみたいな思考だなこれじゃ。

今はほんのり紅く染まっているが雪のように真っ白な肌や肩まで伸ばした手入れのいいブロンドの髪に碧眼であることも相まって本当に可愛い人形のようなだった。今更ながらここがファンタジーの世界だと実感する。ていうかどこでファンタジー感じてんだよ俺！

「あの、これはあなたがやったんでしょうか？」

危ないあのままだったら羞恥で頭が爆発するところだぜ。っと、これとは恐らく血まみれの森の熊さんの死体となぎ倒された木のこただよな。

「ああ、それは……ふむ、ちょっと待っててくれ。」

「え、あの。」

俺は唐突にやるべきことを思い出した。さつきから何故介入するのをやめて傍観にまわっている秋坂を視界に捉える。距離十メートル、いつの間にそんなに離れた。まあいい。

「周りを考えて攻撃しろやあああああああ！！」

俺は一瞬で間合いを詰めると四歩の助走の後、飛び上がり秋坂に向かつて蹴りを放った。秋坂の胸部を俺の蹴りが決る。

秋坂は綺麗な放物線を描き五メートルほど向こう地面に墜落した。

「これでよし。」

俺は少女の元に戻る。

「あのさっきの方は大丈夫なんですか？」

「ああ、あいつはあれぐらいしないと懲りないからな。それこの規格外な破壊を行ったのはあいつだ。」

「つえ、そうなんですか。という事はこれを行った人を倒したあなたはそれよりもっと強いって事ですよね！！」

何、興奮してるんだろっ。

「いや、そん」

そこで言葉をさえぎられた。

「謙遜なさらなくていいですよ。アークベア十頭相手に一人で闘

って勝つなんて並みの人にはできません。その人を倒すなんてあなたは相当に名の通った戦士さんなんですね。」

いや、きつらきつらした笑顔で言われても。確かにあいつと戦って負けることはないだろうが勝つこともないと思う。第一俺は素手であの熊は倒せない。

「グルアアアアア！」

突然森の熊さんが復活した。

な、傷が浅かったか。ていうか周りの奴よりでかい。角三本あるし。

「ア、アークリーダーです。はじめて見ました。」

とにかく落ち着け。なんにしる深手を負っているのは確か、時間を稼いであいつが起きるか出血で死ぬかを待てばいい。でも手負いの獣って凶暴なんだっけ。木の枝拾ってみたけど明らかに強度不足だよ。

「とりあえず、攻撃に巻き込まれないように下がっていてくれ。」

「はい！」

熊と向き合う。熊のほうもこっちに意識が言っているみたいだ。

つまり獲物認定されたって事だな。

熊は片手を振り上げて引つかいてきた。図体の割りにかなり早い。最初に出てきた奴と動きは変わりなし。まさか木の枝で受け止めるわけにもいかにないので横に跳んでかわす。

「おっと。振動か」

地面挟れてやがる。振動がおきるとかパワーが桁違いだな。だが隙も大きい。

「はああああ！」

気合と共に突きを傷口に挟りこんだのだが、如何せん木の枝じゃあ強度が足りない。途中でぽつきり折れてしまった。

「グルアアアア！」

怒ったか。

右から左からさっきの倍以上のスピードで引つかいて来る。動く

たびに大量の血が滲み出しているのだが一向に倒れる気配がない。
もう一発何かすれば倒れるか？それからどうでもいいが角は何の
ためについてるのだろう、爪しか使ってなくね？

足で石を蹴って熊の顔にぶつける。

「ゲル！」

一瞬動きが止まった隙に頭までは届きそうにないので胸部に蹴り
を叩き込んだ。これでかなり内蔵にダメージが行ったはずだ。

熊は一瞬踏みとどまったように見えたが大量の血を流し限界が来
ていたのだろう。倒れこんでしまった。

「勝った。」

地味な勝利だ。秋坂が見たら怒りそうだな。戦いは派手にやるも
んだとかいって。

「すごいです！」

振り返ると例の少女が拍手を送ってくれていた。そういえばまだ
お互いに名前も知らなかった。

「こうして、彼らは今後の物語で重要な人物となる少女と邂逅を
果たしたのだった。続く」

秋坂は這つてくるとメッセージを伝え再び倒れた。

「だからなんでお前はナレーションしてんの？」

第一章・第一部・やっぱりこ都合主義ファンタジー世界か（後書き）

最強な奴の戦闘ってろくな戦闘描写ができないことに気がつきました。

第一章・第二部・その少女の名は……（前書き）

一日更新抜けしましたね。

今回はちよつと長めです。切れ目が分からなかった。明日は投稿します。

第一章・第二部・その少女の名は……

ようやく復活した秋坂も交えて、一通りの紹介を行おうということになったのだが秋坂が何を言い出すか非常に不安だ。と言うわけで先に俺が紹介を済ませてしまおう。

「俺の名前は倉羽くらは 宗助そうすけという。で、こっちの馬鹿が秋坂 光輝。俺達はこの森で迷ってしまつてな。道を探している所でたまたま悲鳴が聞こえて駆けつけたんだ。」

多少真実をオブラートで包みつつ俺の語りは終了し、後は相手の質疑なり返答なりを待てば良かったのだが……どうも秋坂は黙っているということができないらしい。

「ちよつと待った。せつかくの機会なんだからもつと言うことがあるだろう。」

下手にしゃべって異界の人間だつてばれたらどうするんだよ。こつちでは悪魔とか言われているかもしれないだろうが！と秋坂の耳元で叫んでやりたかつたのだがぐつとこらえる。

「何が不足なんだよ。」

「名前だけ交換して終わりとかどんだけさびしいイントロダクションだよ。」

何故、横文字だ。後、お前の紹介には馬鹿とつけてやったぞ。

「じゃあもう好きにしろ……」

「実は俺達異世界人なんだよ。」

『ええ！』

俺と少女の声が重なった。

いきなり確信！！ここまで考えなしだったとは……場合によってはここで秋坂とは袂を分かつことになるかも知れん。

「それは本当なんですか？」

心なしか声が震えているような。でも不の感情は感じられない、

どっちかって言うと感動とかそれに近い。異世界人に悪いイメージは無いのか。どっちにしても秋坂はズバンと言ってしまっただろう。

「ああ、本当だ。」

やっぱりな。

「異世界人がやって来たなんて五十年ぶりですよ！その服も異世界のものなんです。奇抜なデザインだとは思いましたが納得しました。」

信じる方もどうかと思うが、もしかしたら私は異世界人なんて冗談でも言わないような存在なのかもしれない。それとも服とかそこから辺の状況証拠か？

ともかく一つ分かったのは学生服はこっちの世界では奇抜に映るみたいだな。

「しかし秋坂、多少は警戒心と言うものを持ってもいいんじゃないか？」

「いや、こういうのは大抵物語り序盤ではれるもんなんだよ。そこからストーリーも進むしこれくらいで知らせておくべきなんだ。」

だからここは小説の中の世界と違うんだぞ。現実のファンタジーなんだから小説を参考にして話を進めるのはやめてほしい。

「えーと。まあそういうことで俺達が異世界人だというのは事実だな。」

「凄い人だとは思いましたが、まさか異世界人だったなんて。」
何か、そんなに凄いことなのか異世界人って。

「いや異世界人ってそんな凄いのか？」

「当たり前ですよ！過去にこの世界に現れた異世界人は例外なく英雄と言われるほどの功績を残してるんです。あつても異世界から来たんだつたら知らなくて当たり前ですね。すみません。」

異世界人＝英雄この等式は非常にまずい。明らかに面倒なことに巻き込まれそうな匂いがある。と言うかあからさま過ぎてこればかりは秋坂の言うパターンが無視できそうも無い。

「そういえば私まだ名乗っていませんでした。シェルディア・

ルース・レイフィードと申します。」

何かいかにもって感じたな。そうして食いついた奴が一人。

「ここは王族って言うのがパターンだよな。」

「ええっ！どうして分かったんですか。」

本当にそうなのか。秋坂の言うパターンだがもう少し信用したほうがいいのかもしれない。でもフルネーム名乗ったら分かるんじゃない。今さっきこっちの世界に来たとか言っていないしさあ。

「あつ、動揺してフルネームを名乗っていました。」

「今更かい。」

ついナチュラルに突っ込んでしまったが、まさかここでボケ要因の追加か、俺一人でさばききれのだろうか。先行きが……って心配すべきはそこじゃない、そこじゃないぞ俺！！

「でも、歴史上でも同時に二人の異世界人が現れるなんて前代未聞なんですよ！動揺して口を滑らすのも無理は無いと思います。それに、クラハ様には本名を名乗っておきたかったしって何でもありません。」

シエルディアは何故か紅い顔をしてあたふたとしている。それを見て俺は少なからず本当に王女なのだろうかと思うところもあったが、とりあえず今までずっとおもっていた疑問を口にする。

「所で王女様が何故こんな所にいるんだ？」

「いや、そこは気にしちやいけない所じゃない。」

この際、秋坂は無視。てか、ボケ要因が突っ込むんじゃない。

「私は護衛の騎士達と共に王都に向かっていたんですけど途中で野営をする時があったんです。その時暇だったので目を盗んで散歩をしようと森に入ったら迷子につて、ああ！……えっとそうじゃない、そうです。散歩の途中なんです。本当ですよ、王女が迷子になるわけなんか無いじゃないですか！」

今更嘘ついても遅いだろうと思ったが黙っておいてあげることにする。涙目になりながら必死に否定されるとそういう情も沸くだろう？

「それでアークベアにあつて今に至るわけです。」

なるほど。所でそうは見えないが仮にも王女に敬語使わなくて大丈夫なのだろうか。この狼藉者が！（意味は知らない）とか言われて不敬罪に問われて死刑とかにならないのだろうか？

「ところで俺達普通に敬語とか使つてないけど良いのか？」

「そこも気にしちゃいけないところだつて。」

秋坂の言うことはいまいち理解に苦しむ。なのでこの際無視。あれ、なんかこの言葉近視感が凄くある。

「だ、大丈夫です。私、そんなに気にするほうではないですし、クラ八様には敬語を使つてほしくないです。」

会つて一日もたつてませんが！

「なら俺にも敬語を使うのはやめてくれないか、何かいやだ。敬語は言い慣れても、言われ慣れてもない。」

「いや、このしゃべり方は性格ですので多分無理だと思います。」

「じゃあ、せめてクラ八様はやめてくれないか？」

自分で言つて身震いしてしまった。

「えっと、それではなんて呼べば良いでしょうか？」

この人本当に王女なんだろうか？丁寧すぎないか言葉使い。

「親しい奴には宗助と呼ばれてるからそれでいい。こつちの世界ではどうか知らないが、俺達の世界でファーストネームは後に来るんだ。」

「ソウスケ様じゃなくてソウスケですね。」

「ああ、それでいい。」

「じゃあ、俺も秋坂で良いぜ。何故だか知らないが向こつの世界で名前で呼ぶ奴はいなかったな。」

そういえば何でだろうな。光輝つて言う違和感がある。

「アキザカでいいんですね。」

「おう。」

「それでは私のこともシエルディアとお呼びください。この国では名前はファーストネームから始まるんですよ。」

「よし、シエルディアちゃんて良いんだな。」

確かにあの容姿はちゃんか相応しかろうが秋坂それで良いのか？

「他に候補は無いのだろうか？」

ちよつと呼び捨てで呼ぶのには抵抗があるのだが。

「ソウスケが先に言い出したんですよ。そう呼んでくれなきゃいやです。」

シエルディアは悪戯っぽく笑っていた。それがとてもかわいいと思ってしまったのは余談だ。

「そ、それじゃあシエルディアでいいんだな。」

「はい！」

満面の笑みを見せてくれたようだが、俺は精心的ダメージが大きくあまり余裕は無い。あいつを例外として考えても女の子を名前（しかも呼び捨て）で呼んだのは初めての経験である。俺にとっては少なからずシヨックである。

でそんなことはいいのだが問題なのはこれからどうするかだな。

「なあ、宗助。顔が良いって得だよな。」

「何のことだ。」

「やっぱりパターンなんだよな……つま、俺は応援してるぞ。」

何の話だよ。いや、まあいい。

「俺達はとりあえずこれからどうするべきか考えるべきだと思う。」

「

「それなら、騎士達が私を探していると思うので見つけてもらうのを待って一緒に王都に来れば良いと思います。」

「俺もそれが良いと思うぞ。パターンだし。」

秋坂、パターンパターンうるさい。しかし王都に行くというのはどうだろうか？ハイリスクハイリターンな提案な気がする。王女はじゃなくてシエルディアは普通に信じてくれたが他のものもそうとは限らない。何より信じて貰ったとしても魔王倒してくれ的な展開になったらどうするんだろう。だが、王都とかいうだけあって情報も人も集まっているだろう。

もしかしたら帰るための手がかりもあるかと思うのも事実だ。異世界で帰るための手がかりを探すというのもパターンなんだけどな「どうするかなあ。何か怖いしな。」

王女に対して呼び捨てを騎士達がどう思うかとか、この国の法律を知らぬ間に犯していたりしないだろうかとか色々と思うところはある。特に法律に関してはかなり重要だ。法律で旅をするには身分証が必要であるとかいうのがあったりとかしたらこの時点でアウトだ。

まあ、そういう常識を王都で学ぶっていうのもいいだろうが……

「やっぱりやめといた方がいいような気がする。」

ここはあえてパターンに逆らうのもありだな。

「それはだめですよ。」

何故かシエルディアから反論が、秋坂辺りが何か言うような気がしたんだが。

「恩には礼を持って返すべしと言う家訓がレイフィード家にはあるんです。命を救ってもらっておきながら恩を返さずというのは私の延いてはレイフィード家のさらにはレイフィード王国の名に傷をつけることになります。どうかこの場は付いて来て頂けないでしょうか？」

いや、大げさすぎじゃないか？

「それでも、もしソウスケが付いて来てくれないならソウスケのこと犯罪者にしちゃいますよ？」

笑顔でとんでもない事言いやがる。選択肢が消えたじゃないか。ひょっとしたら俺はとんでもない奴と知り合ってしまったかも知れん。

「分かった。」

俺はお手上げのしぐさを取るとそう告げた。

「良かったです。これでレイフィード王国の名誉は保たれました。」

「シエルディア俺はお前を誤解していたかもしれない。」

「姫様ご無事ですか!!」

ちょうど良く騎士の人が到着したみたいだ。ヘルムを除いた重装備だったが普通に歩いてきている。相当訓練をつんだんだろうなあと考えた。何この感想文。

「貴様等、姫様に何を」

早速デスカ……

「アースウッドさん違います。彼らは私を助けてくれたんです。」

「そういう事になってます。」

アースウッドさんは見た目二十そこそこに見える。基本年上は敬語同年代それ以下はタメな俺はそれに則って敬語を使うことにした。

「ああ、なるほど。道理で、すまない誤解していたようだ。」

アースウッドさんは周りの熊^{アークベア}だったかの死体を見て把握してくれたようだ。

「ソウスケ、紹介します。こちらレイフィード王国第二近衛部隊部長のアースウッドさんです。私の直属の護衛でもあります。」

「アースウッドだ。しかし君達はかなり腕が立つようだ。これほどの量のアークベアを二人で相手にするとは王都の騎士団の中でも早々できるものはないだろう。」

アースベアってそんなに強いのか。まあ熊だもんな。

「俺は倉羽 宗助といいます。それと一つ誤解しているようです。俺はほとんど何もしてませんよ。」

「何!!」

アースウッドさんは目を見開いている。そんなに凄いことなのだろうか？確かに秋坂は人間離れしているが。

「一応、俺がほとんど相手にしたぜ。確かに」

「失礼だが君の名は？」

「秋坂 光輝。将来は正義の味方になりたいと思っている。」

「ふむ、聞かない名前だ。」

突っ込まないのか。

「当たり前ですよ。彼等は異世界人だそうです。」

「姫様それは本当ですか？」

「ええ。」

アースウッドさんは俺達の顔を見てもう一度広場を見渡し向き直った。

「君達どちらでもいいぜひともお手合わせ願えないだろうか。」

何を急に言い出すのだろうこの人は口には出さなかったが多分俺はそんな顔をしている。

「姫様のお言葉ではあるが本当だととても信じられない。異世界人は誰もが武勇の誉れが高いと聞く。私と勝負して勝てたら君達を信用するこれでどうだろう。」

「ああ、いいぜ。ただし戦うのは宗助、お前な。」

「何故？」

お前のほうが戦えるだろ？

「秋坂は何故か自分ではなく宗助にアースウッドと戦うように仕向けたその真意はいかに」

もう俺は突っ込まない。

第一章・第二部・その少女の名は……（後書き）

これ書いてから気づいたんですね。姫様の名前スパロボKのシエルディア・ルーシェにそっくりです。なんとなく聞いたことあるなあと思っただけです。セルディアに変えましょうか。それからもう一つ後半のレイフィードですがソニックプリンスに出てくる主人公に被ってるんですけどね。これも後から気づきました。別にどちらも意識してたわけじゃないですよ。でも、ソニックプリンスのメイド服が似合うと言う設定だけは入れようかと思いました。……
て言うかこれちゃんと伝わってるんですかね。スパロボはともかくソニックプリンス誰も知らないですよ。ああ、調べなくていいですよ。十八歳未満お断りな感じですから。私がまだ若かった頃異常なほどにシューティングにはまった時期がありましたね。
そこまではないか
ギヤラクシーフォース知ってます。あれが始まりなんですよ。それ以来古いとこならインベーターまでさかのぼったり東方系もやりましたね。最近だったら四聖龍神録plus（これいいですよ。弹幕ゲーが好きなら）とかね。その折にですねソニックプリンスの噂を耳にしたんですよ。その頃にはシューティングと名の付くものは所構わずなりふりかわわずプレイしていましたから。ボム縛りでね。はつきり言うとシューティングに命をかけていたんですよ。で肝心のソニックプリンスがね。ゲームシステムが全くの秘密で説明書見たら分かりますよとか言う挑戦的な内容だったんですよ。これは私のシューター魂への挑戦かとクリアできるならして見やがれとそう言っているのかとそう思った買ってみたところ本当にシューティングみたいだ。これエロゲメインだよなシューティングじゃないよなもしかしてゲームシステム隠してたのこのため？ そうなんですか？ そうなの？ 私のシューティング魂をもてあそばやがつてええええええ！！！！上記のような理由から私は一時期シューティングが大嫌いになりました。そしてそのトラウマは今再び開かれたのです。

ああ、私はダークサイドに落ちてしまいました。

ここまで付き合ってくれた人なんかありがとうございます。て言うかこれ後書きなんでしょうか？

第一章・第三部・最後まで諦めなかった奴が勝つんだ！（前書き）

前回に一つミスが『ちょうど良く騎士の人たちが到着したみたいだ。』とありましたが、『ちょうど良く騎士の人が到着したみたいだ。』が正しいです。

一人しか出てこないと思って不思議に思った方が居たらすみません。

第一章・第三部・最後まで諦めなかった奴が勝つんだ！

何だかんだでアースウッドさんと勝負することになってしまったんだが……秋坂よ、何故俺なんだ。

「ソウスケなら大丈夫ですよ。」

シエルディアそんな期待の込めた眼差しで俺を見るのはやめてくれないか。いやよく考えたら別に異世界人だと信じてもらえなくても良くないか？

そりゃあ帰る方法を調べづらくなるかもしれないが、別に異世界人だからといって何か得になる訳でもないだろう。英雄とかそんな物になりたくもないし。

「なあ、秋坂本当に何故俺なんだ？」

「それはだな、一番最初熊と戦った時グローブ着けてなかったただろ。それで手を傷めた上にさっきの技も防具なしでやったら、それでちよつと足に負担がな。」

確かにあの熊筋肉がえらい有りそうだったから素手で殴ったらそうなるだろうな。あまつさえあの巨体を貫くほどの威力で殴ったんだ普通なら手が潰れててもおかしくない。さっき足技を使ったのもその所為か。

足技は威力が高い分移動しながら使うといったことができないから拳を使うより攻撃のスピードが遅くなる。ましてや防具なしだったから足への負担で足が使えなくなってしまうように一撃で決めて、なおかつシエルディアになるべく危険が無いようにするのはあの全範囲攻撃が一番だったかもな。

こいつちゃんと考えてやってたのか、一応謝るべきか。いやちよつと待てよ。

「前、同じ技を使った時は防具も着けてなかったがそんなこと無かったじゃないか。」

「ああ、実は気を充実させれば技の負担をかなり減らせるんだが……すっかり忘れてたんだよな。」

秋坂は声を上げて笑っている。一瞬拳を硬く握ったがゆっくり手を開く。そして笑顔を作った。

「お前は馬鹿か!!」

秋坂に神速の回し蹴りを叩き込む。

「ぐほつ。い、痛いって。」

ち、弱かったか。それとも今度は気を充実させて受けたかどっちかだ。

「アースウッドさん。俺が相手をします。この馬鹿に任せておくと後難を招きそうなので。」

「それはいいのだが、武器は使わないのか？」

「はい、でも大丈夫ですよ。真剣を使ってくれても。」

怪我をしないためにも回避に全力を注ぐからな。

「ふむ、確かに本当に異世界人なのだとしたら問題は無いだろうな。」

異世界人どんだけ化け物だったんだ。素手対剣で問題ないって。

「合図は私がしましょう。」

シエルディアがそう言ったのでそうすることにした。

お互いに数メートルほど離れた場所に立って構える。アースウッドさんは騎士らしく正眼に構えている。かつこいいな。

ちなみに俺はただ立ってるだけだ。力を抜いていたほうが返って早く動ける時もある。気持ちさえ張り詰めさせときゃいいんだと昔教えられたからな。

何一つ動きを見逃さないようにじっと見つめる。真剣なんだし当たったらしゃれにならない。

そういえば

「勝敗はどうやって決めます？」

「相手に降参させるか、寸止めなどの方法で相手を動けなくする
というのでどうだろうか？」

うん、まあ問題ない。いや不安だけど。

「それで行きましょう。」

「よし、それじゃあ姫様何時でもいいです。はじめてください。」

「分かりました。それでは始めの合図で行きますよ。」

「頑張れよう。」

秋坂は完全に見物モードでへたりこんでいた。全く緊張感の無い。
「初め！」

その合図と共に俺はアースウッドさんの方にじりじりによって行く。

アースウッドさんの方はハンデか知らないがこっちに先制をくれるようだった。構えを崩さず俺の攻撃を待ち受けるつもりらしい。

俺はアースウッドさんまで後八歩というところで駆け出した。攻撃範囲に入った所で狙いは足を払うつもりで蹴りを放ったが、流石部隊長だけあって完璧に読まれていたようだ俺の攻撃に合わせて跳んで避けられた。よくあの装備で跳べると思う。

避けた後から流れるような動作で袈裟切りを繰り返してくる。俺は上体を反らす事でぎりぎりその刃を避け飛び退く。そこからは防戦一方の戦いだ。

足技はやはり放った後の隙がでかいので迂闊に出せない。拳もそんな範囲まで容易に近づかせてくれるはずも無く、さらにはあちらの攻撃は避ける事でしか防ぐ術は無いのだ。

結果、自然な成り行きで相手の太刀筋を避け続ける事になる。

それでも不利だとは思っていない。アースウッドさんの剣技は隙の少ない物だったが見当たらないということは無かったし、何よりあのスピードでは俺に当てることはできない。

「なかなかいい動きをする。だが避けてばかりでは勝利は得られんだろうー！」

「そっちも相当修練を積んでいるようですね。なかなか避けるの

も大変です。」

「私には余裕そうに見えるが、だが私もまだ全力を出し切ったわけではない。」

時間と共に太刀筋が良く見えてくる。確かに速度は上がったがもう見切った動きだ。

もうそろそろいけるかな？

アースウッドさんが横薙ぎをしようとした間合いに避けようとせず逆に踏み込む。

「な！！」

大きく相手の左手に踏み出した右足を軸にそのまま回転、相手の後ろ手に回りこむ。相手の剣速を上回るスピードで移動したためアースウッドさんは切ったはずの俺の感触が無いことを不思議に思っているだろう。

さらに回転の勢いを利用し左肘を相手のうなじに叩き付ける。ヘルムを着けていなかったため唯一露出した急所だ。

「がつ！」

アースウッドさんは急所を打たれたため地面に倒れこんだ。

「これ、勝ちでいいですね？」

「ああ、体が動かん。君は強いな。」

人間の体に幾つかある急所だがそこを撃たれるとしばらくの間人間は動けなくなるのだ。効率よくダメージを与えるには主にここを狙っていくことになる。

だが、何故かアースウッドさんはすぐに回復して立ち上がった。

「ソウスケはやっぱ凄いです！」

「お前戦いが地味すぎ。派手に戦ってこそ漢だろ！」

無茶言ふなよ秋坂。体一つで派手なエフェクト繰り出すにはそれこそ魔法でも使わんと無理だ。

「やはり、君達が異世界人というのは本当のようだな。戦ってみて分かったこつちの世界にそのような動きをするものはいない。それからソウスケくん一つ聴きたいことがあるのだが。」

「ソウスケでいいですよ。それからこっちも一つ聞きたいことがあります。」

尋常じゃないだろその回復力。結構強めに打ったつもりなのだが。

「私は後でいいよ、何かな？」

「途中から妙だと思ったんですが、回復力もそうですけど身体能力も普通に訓練したにしては異常に上がっているような気がします。が、何ですかそれ。」

「異世界から来たのでは知らなくて当然だな。これは身体能力を向上させる術の一種でな有体に言えば魔法だ。」

来たかファンタジー。ついにまともなファンタジー見れたな。今までは熊とか散々だったし。

「えー、俺はどうせなら最初はもっと派手なのが見たかったぜ。」

「秋坂うるさい。魔法ですか、やっぱりあるんですね。俺達の世界にはそんなもの無いですから少し驚きましたよ。」

「ええ！ソウスケ達の世界には魔法が無いのですか。」

「ああ。」

気孔術とか、超能力っぽい奴とかはあったがな。

「やはり君達は魔法が無い世界から来たのか。」

「所で聞きたいことは？」

「ああ、そうだったな。実はさっきの戦いで思ったんだが、君の間合いの取り方や足運びを見ていると剣士のそれに近いような気がする。ソウスケは何故剣を使わない？」

見抜かれていたか、確かに本来なら俺は剣を使う。

「俺には剣を抜く理由が無いんです。」

なるべく普通の声で言えたと思う。今の俺には剣を抜く理由が無い。剣はもう使わないと誓ったのだ。

「そうか、剣を抜くには理由があるもの。そう簡単に抜くのを善しとしないのもまた剣の道だろう。おっと、それよりすっかり遅くなってしまった。早く戻らねば。」

「そういえばアースウッドさん言っていませんでしたが、お二人

をお城へ招くことにしました。」

「命の恩人で異世界人となればそうするのが礼儀ですね。分かりました。ソウスケとアキザ力は馬に乗れるか？」

馬に乗れるか、無理だろ。

「残念ながら無理ですね。」

「俺も無理だ。」

「私の馬車と一緒に乗ってもらえばいいじゃないですか。」

「いや今日あったばかりの者を一緒に乗せるのはどうかと。確かに信用には置けると思いますが。」

「仮にも私の命の恩人を歩かせる気ですか。」

何か雰囲気違うな、シエルディア。

「確かに一理あります。私も信用できると思いますが。一応私も姫様の身の安全をお守りするために居るのですから……」

「アースウッドさん私の命令が聞けませんか？」

「い、いいえ。姫様、余計な諫言でした。」

シエルディア怖っ！なんだか首筋に薄ら寒いものを感じる。人つて変わるんだね。

アースウッドさんは懷から笛を取り出すとおもむろに吹いた。高い音が森に響き渡る。

「何ですか今の。」

「姫様を見つけたので元の場所に集まれという意味だ。ばらばらに分かれて探していたのな。さあ、私達も戻ろう。案内するから付いてきてくれ。姫様もこちらへ。」

なるほど。そうだろうな、メール送って伝えるわけにもいかんよな。そういえばここって電波届くのだろうか？

「こうして、俺達は王都と一緒に向かうことになった。次回をこ
う御期待」

「秋坂そろそろそれやめないか？」

第一章・第三部・最後まで諦めなかった奴が勝つんだ！（後書き）

今回はどうも文字が詰まってしまいましたね。

次回は気をつけようと思います。

戦闘シーンをまたと思われた方すみません。それ以外にすんなりアースウッドさんに信じてもらえる方法が思いつかなかったんですよ。だとすると王都についてからも王様の前で戦闘シーン書かないといけないでしょうか？まあ、そこら辺はのりでやります。

でもこの調子でのりで言うていくとテンプレの間はいいですけどそこからそれると帰ってこれないのではないのでしょうか？

基本私はストーリーも名前も何でも即決のり決めタイプなので。

それでこの小説のタイトルも凄いことになってますよね。

天元突破とか少年突破とかそこら辺を彷彿させるようなタイトルだとさっき思いました。分かりますこのネタ。この小説いったい何歳当たり狙って書いてるんでしょう？

読者の皆様のほとんどはこのようなネタが分からない人なんじゃないでしょうか？

小説のじゃなくてあとがきですよ。小説には出さないように気をつけています。ナチュラルにk o o ーになれ入れそうになりましたが……

あとがき離れが進んでいるんじゃないかと。

私不安で不安で。

タイトルから中二的なものを感じ取った人すみません。でも作者はどっちかって言うとか秋坂タイプなので。

それから最近秋坂空気になってません？

もうちょっとはじけさせてみましょうか？

ともかく御意見、御感想お待ちしております。おリマース。

第一章・第四部・正義の味方（仮）の決意と皆勤賞を狙っていた学生の決意（前

祝・PV1000超えました。

だからといって何かあるわけでもないですが……5000超えたら
おまけでも書きますか？

第一章・第四部・正義の味方（仮）の決意と皆勤賞を狙っていた学生の決意

とりあえず大きな道らしき所に出たら大勢人が居て驚いた。なんでも侍女やその他の雑用の人まで含めたら百人ちよつとになるらしい。何故こんなに必要なんだろうか？

それから初めて乗る馬車だがきちんと道が舗装されていることもあってそんなに乗り心地も悪くは無い。後三、四人は乗れそうなほど広い。

「なあ、シエルディア。こんなに連れて何の用事だったんだ？」

「国内の視察です。年に数回大規模な視察を行うんですよ。今代のレイフィード家は男の子が生まれなくて長女である私が王位を継ぐ可能性が非常に高いんですよ。父上もその気ですから今回は私も視察について行って見聞を広めるようにと。」

でもてつきりそういう場合は結婚でもして相手の男に王位を継がせるとかと思っただが、準王家の貴族とか候補は居ないのだろうか？

無能な奴ばつとか極度の親馬鹿で娘は嫁にやらんとかそう言う理由だろうか、できることなら前者であってほしいな。厳格そうなイメージってあるじゃないか陛下とかって。

「なるほどね。」

「所で俺達も魔法って使えるかな？」

秋坂の顔がきらきらしている。でも俺もそれは気になるな。異世界に来たんだからそれぐらいの特典はあっていいと思う。

「使えると思います。伝承にも異世界人の方が魔法を使っている場面もありますし。私も属性魔法は使えるのでそちらのほうの適正は見てあげられますが……どうします？」

「ぜひ見てくれ。」

「俺も頼む。」

なんか、ときどきするな。手一振りで突風を起こしたりとか憧れたな小さい頃。

「ではアキザカの方からいきますね。これから使うのは属性魔法でも何でもないんですけどサーチって言う探知系の初歩の魔法で魔力の総量やら適正属性などを知ることができるんです。ちなみに私は意識しないと無理ですがこれを無意識に常に使える場合はセンスというんですよ。じゃあ見てみますね。」

何か呟くでもなくシエルディアは集中するためか一度目を瞑りそして目を開けた。

「アキザカの魔力総量は……ご、五十億フェノムって事は一万イルビナを超えているじゃないですか!」

さっぱり意味が分からない。何なんだろう、その戦闘能力が予想以上だったときみたいな反応は。

「フェノムとかって何なんだ?」

「あ、すみません。フェノムが魔力を表す単位で一番小さいものなんです、十フェノムで一ラキア、百ラキアで一マトキさらに百マトキで一イルビナになるんですが、今まで記録に残っている中で人間の持ちうる最大保有魔力は一万イルビナが最高とされてきたんです。アキザカはその五倍の五万イルビナ、聞いたことありません。」

こっちでもお前は異常なんだな。というか逆にアキザカは何処の部分で普通なんだろう?

「やっぱり、俺って最強?」

「聞くなよ、俺に。」

「それから、属性との相性ですがどの属性とも相性の良いです。これも聞いたことありませんよ。大抵どれかが強ければその弱点属性は弱くなるんですけど。」

シエルディアそれぐらいで驚いて居たら身がもたないぞ。こいつ

は本気で正義の味方目指してるからな。

「まあ、俺は天才で正義の心を持つてるから不可能なんてないね。」

そう、こいつはこんな奴なんだよ。こいつの所為で俺は一生知らないで済んだであろう悪の組織とかの幹部と命を狙われる仲になったり、地球侵略をもくろむ悪の宇宙人と戦うはめになったり、拳句の果てには悪魔だの妖怪だの訳の分からない戦いに巻き込まれるし、こいつと居るとろくなことになるない。

あれ、冷静に考えるとこつちの世界の方がまともじゃないか？

そもそも正義と悪の基準って何なんだ！

「次はソウスケのを見てみますね。」

まあ、一般並みにはあつてほしいな。

「えっと、魔力総量が……五億フェノムです。これでも驚きなんですけどね。それから相性が良い属性は『風』だけです。でも最高レベルの相性の良さです。同化も可能なほどです。」

風か、嫌いじゃない。

「同化とは？」

「相性の良さがあある一定の値を超えると精霊の力を借りて行う精霊魔法が使える様になるんです。これも使える人はかなり少ないんですが、さらにその仲でも特に相性の高い人は精霊を直接この世に呼び出して直接力を借りられるようになるんです。これが同化といます。」

精霊とかも居るわけか。精霊ってどんな奴だろうな？

「調べてくれてありがとうな。」

「そんな大したことじゃ、ありませんよ。」

シエルディアは笑いながら返してくれた。

「宗助、俺は決めたぞ。」

「何をだよ。」

どうせろくでもないことを言うに違いない。

「俺はこの世界を救う正義の味方になる！」

「お前まだ見習いじゃないか。」

やはりろくでもないことだった。帰ることを考えようよちょっとでもいいからさ。

「俺は確かにまだ師匠に認めてもらっていない。」

師匠ししょうつて言うのは元の世界で秋坂の正義の味方の師匠だったな。

雷轟らいこう 正義せいぎさんだったけ。

「だからこそ、この世界を救い師匠に認めてもらうんだ。仮にそれを抜きに考えたとしても目の前の困っている奴はほっとけないだろ。だから俺はこの世界を救うぜ！」

「お前が言っても聞かない奴だとわかってているが、考え直さないか？」

「いや、なるっていったらなるね。」

こいつ殴っていいかな？

「ソウスケ達はやはり世界を救うおつもりなのですね？」

「そうだぜ！」

俺は早く文明社会に帰りたいのだが、この馬鹿をほって帰るわけにもいかない。

「さつさと救って帰るぞ。最高でも三ヶ月以内に帰らないと留年するからな。」

「短いよ！」

「正義の味方に不可能は無いんだろ、これぐらいやってこそ正義の味方だ。」

「そうだよな。やってできないことは一つも無いって師匠も言ってたし、いっちょ三ヶ月で世界を平和にして見せるぜ！」

アキザ力は扱いやすいことだけが取り柄だな。

「やはりソウスケは元の世界に帰ってしまわれるんですか？」

何でそんなにあからさまに悲しそうなんだよ。

「いや、まあ帰れたら帰りたいけどそんなにすぐじゃないし、しばらくはこっちに居るから。」

「本当ですか？」

シエルディアえらい追求してくるな。

「ああ。」

帰る手段を探す時間もいるし、しばらくは帰れないだろう。

「約束ですよ。」

「分かった約束する。」

しかし、三ヶ月なんて無謀なリミット本当に達成できるのだろうか？しかしこれを過ぎると時間を越えてあの日に帰らないといけなくなる。時限突破なんて能力こっちの世界にだってあるかどうか怪しい。

でも、

「それでも、留年するわけにはいかないんだ。留年するぐらいだったら俺は時限突破だって可能にしてみせる！」

「こうして二人はそれぞれの決意をして王都へたどり着いたのだった。」

秋坂いい加減突っ込みのバリエーションが無くなって来たんだがなんて言えいいい？

第一章・第四部・正義の味方（仮）の決意と皆勤賞を狙っていた学生の決意（後

かなり無理やりにタイトルと絡ませてみました。

それから今回文章が少なめで作りが荒い感じがするのは無理やり時間をひねり出して投稿したからです。

昨日投稿は無理だと言っておけば、後の祭りです。

本来なら移動のシーンは飛ばしていきなり王都に着く予定だったんですけどねえ。

それと昨日あらすじ変えてみたんですけど。そしたら昨日だけでPVが822ありました。確かにあらすじは適当に書いてたんですけどこの増大は異常だと思います。本来だったら二日でPV千超えたって事じゃないですか。

それでは、感想や改善点などコメントしてくれるとうれしいです。

第一章・第五部・気合さえあれば何とかなるだよぉ!!（前書き）

どうやっても真夜中に更新することになるんですよ。一時間遅れです今日は。

第一章・第五部・気合さえあれば何とかなるだよお！！

王都『グエラ・ベル』、リキヴェア平原に山を作りその上に築かれた高低差のある町並みは三段に分かれ王城である『フォートラスト城』は一番高い三段目に位置している。

二段目は上流区、一段目は中下流区となり、一段目を囲うようにして二重の防壁と自然の川を利用した三重の堀が築かれ守りを堅牢なものとしていた。

都には地下水を利用した水道が引かれており、近隣諸国でも水の豊富な都としても有名である。各地から人が集まり物流も豊富で商業でも、軍備でも、行政でも、全ての面においてレイフィードの中心の地であるといえる。

とまあこれがシエルディアから聞いた王都の予備知識だ。

そして現在向かい合っている跳ね橋が下ろされた巨大な門は東西南北四つの門の中でも城の正面に位置し正式な正門でもある南門だ。そのまま真っ直ぐ行けば城に着くように思われるのだが戦火の激しい頃に築かれた街らしく素直に行っても城にはたどり着けない様になっているらしい。平和な世においてはただ城に行きにくいだけであまり役に立ってるとは言えないらしいのだが。

「すっかり日も暮れたな。」

広い平原の先に広がる地平線、沈み行く赤い太陽を眺めながら望郷の念に浸つての言葉ではなく今日学校を生まれて初めてサボったことへの後悔を思つてだ。

もう高校も終わる頃だろう。俺の皆勤賞が……

「いよいよこの先の二つの門をくぐると王都ですよ。」

今までは例え地球が危機に晒されていたとしても、必ず学校への登校はどんなことが起ころうと間に合わせて来たのに。登校中に立ち塞がったどんな敵にも勝利して来たというのに。こんなことで、こんなことで俺の十二年と八ヶ月とちよつとに及ぶ無遅刻無欠

席記録が破られていいというのかあああああああああああああ
あああああああああつ!!!

と言う具合に俺は現在言うまでも無く落ち込んでいる。

今までは理解不能な事態で冷静に頭が働かなかったのだが、冷静になった今なら分かる。俺は今日学校をさぼったんだ。

徒歩一時間の道を法律無視上等で五分で走ったあの日がまだ記憶に新しい。

登校を妨げる敵の中で最強は有神家の犬か交通法だと思っていたのに、伏兵は意外な所にいたのだ。いや案外意外でもなかったかもしれない。ともかく俺は秋坂にぶつかられてここにいる。

異世界に來た最大の原因は秋坂 光輝なのだ。

ラスボスが身内にいたとは、そしてまさか敗れる羽目になるとは予想だにしていなかった。

登校中においては無敵そんな思いは幻想のものだったのか。

嗚呼、無常。我が人生に意味など無かったか……

「ソウスケどうしたんでしょう？さつきから視線が動いてません心なしか瞳に生気が宿って無いように見えるんですけど。」

「そつとしておいてやれ。宗助は皆勤賞に命を懸けていたからな。」

┐

という具合に時間が過ぎてようやく俺達は入城した。こんな巨大な建造物見たこと無いな。高層ビルよりでかいって事は無いんだろうが、威圧感を感じる。その所為だろう。

ようやく俺は馬車から降りることができ俺はなんとなく伸びをする。

「私は父上に会わなければならないので侍女の方に客間に案内するように言っておきます。その後、恐らく謁見の間に呼ばれると思います。今日は遅いので明日になるかもしれません。」

「やっぱり、王様とは会わないといけないか。」

「やっぱり、城って塔が何本も付いてるもんなんだな。」

莊嚴たる風格の城も秋坂から見れば塔がいっぱい付いてる建物か、

俺が言うのもなんだが秋坂の美的センスはどこかおかしい気がする。その後、俺達はメイド服っぽいモノを着た女の人に（まあ男が着てたら逃げたくなっただろうが）案内された部屋でくつろいでいた。

「今日一日は長かったな。」

「なんたつて六話も、じゃなくて新しいことばっかだったし。」

「それもそうだよな。」

本当は一人一部屋用意されていたのだが秋坂がつまらんとかいつてこつちに来ているのだ。

俺は赤いソファの上で寝ていたがたたき起こされた。

「なあ、魔法ってどうやって使うのかな。」

「少しは我慢できないのか、馬車の中でもそればっか言ってたよな。」

シエルディアはアークベアを相手にして魔力を切らしてたため明日ぐらいにその道の人に頼んでくれるという話だったじゃないか。

「明日まで待てねえ。しょうがない、やってみるか。」

「やめとけ。下手して城、壊したらどうするんだ。」

こいつなら教えられなくても一人でやりそうだ。

「気と同じように集中させて魔力集めればいいかな。」

人の話を聞けよ！

「だからやめとけて。」

「大丈夫だ肉体強化しからない。気と混ぜてみるか、それでそのままフォームチェンジとっ！」

秋坂は俺はもう見慣れた赤い火炎に包まれた状態になった。正義のヒーローは変身する。これが秋坂の師匠が教えてくれた正義の味方本気モードらしい。

この状態の秋坂には一秒で負ける自信がある。それほどこの姿になると秋坂の基礎戦闘値は跳ね上がる。

「すげえぞ、これなら今までの十倍強いことができそうだ。」

確かに何時もより炎がでかいな。

「雷装・鬱壘白虚！」

その言葉と共に秋坂を纏う紅炎が白電へと姿を変えた。

「他にも水とか土とかもいけるかな？」

「何でいきなり使いこなしてんだよ！」

こいつ非常識すぎるだろ。友情・努力・勝利が熱いマンガの基本なのに努力ねえだろ！

「お前もやろうと思えばできるんじゃないやね。」

「簡単に言うが、俺はまだ魔力自体つかめてないんだが。」

「気と同じだ。簡単だって。」

俺もかつてはそう言う物を意識したことがある。なんだろうか力を体の中心のほうに集めると剣技が格段に冴えて来るんだよな。

あれと同じように中心に力を集めて放つイメージ。

「吹き飛ばせ。」

適当に言ってみると本当に風が吹き荒れた。

「マジでか。」

「何で俺を狙ったんだ！」

顕現した見えざる奔流は秋坂へと襲い掛かり白雷の鎧を吹き飛ばして消えた。

つち、秋坂は無傷か。皆勤賞のことを恨んでいない訳ではない。

「俺の魔力と気を吹き飛ばしたみたいだな。」

「そのようだ。」

まさか本当に出るとはな。

「さて、やることも無くなったし探検でもしようぜ。」

いや冒険しようぜ見たいなノリで言われても。

「いや普通におとなしくしとくべきだろ。問題起こしたらことだぞ。」

「いいから行こうぜ。」

秋坂は俺の後ろに回りこむと肩を掴んだ。そしてそのまま押してくる。

「この馬鹿力が！やめろって。」

「その程度の抵抗で俺が折れるか！」

そのまま部屋の外に連れ出される。絶対いつか復讐してやる。そう俺は心に誓った。

「さてどっち行く。」

「右。じゃ無くて俺は反対したるって聞いてないし。待て、走るなよ。迷子になるだろぅがあああああ！」

ほっとく訳にもいかず秋坂の背中を追っていくといつの間にか知らない場所にいた。あれ、どうしよう？

「それでここは何処だろぅな？」

「俺が聞きたいよ、馬鹿！」

さつきから同じような道を何度も行ったり来たりしている気がする。

日も暮れてきて辺りは薄暗い、人の気配も無い。

「君達は何者なのかな？」

驚いて振り返ると黒いローブを纏った女の子がいた。この人に聞けば帰り道が分かるかも。

「道に迷ってしまったて、道を聞いてもいいですか？」

「おかしな侵入者だね。迷子になった上に道を聞くなんてさ。」

あれ、侵入者？誰のことだろぅな。辺りは真っ暗うえ人氣が無い、学生服（真っ黒）着た俺達その上見ない顔である。侵入者に間違われても仕方が無いのか、もしかして。

「魔力を全く隠さないで侵入なんて全くなめてくれたものだね。」

その魔力は魔族だろぅ？人間なめてると痛い目を見るよ！ライジングバースト！」

「ふ、吹き飛ばせ！」

光の奔流が俺達に襲い掛かってくるのを見て俺は反射的に魔法を使ってかき消した。

「デイスペルの一種？やるね、でも今度はそうはいかないかもよ。トライアングルディストラクション！」

「フォームチェンジ、ぜんそうぜんかん全装全冠・てんりゅうむそう纏劉無双！」

瞬時に城の一部を破壊して迫ってきた衝撃波を秋坂は変身状態で

受け止めていた。

「ここは俺に任せろ！そろそろ見せ場がほしいしな。」

「さつきから思ってたんだが技名は咄嗟に考えてるのか？」

何故かあいつの技の中でフォームチェンジだけカタカナなんだよな。技を叫ぶのは何か知らんが決まりだそうだ。

「まさか無属性の最上級魔法を受け止めるなんてね。久々に本気を出せそうだね。僕は第三魔道兵師団師団長アリア・ルーメイ、全力で行かせてもらうよ！」

「名乗られては名乗らないわけにはいかないな。俺の名前は秋坂光輝、俺も全力で行くぜ！」

全力はやめろよ、城崩れるから。

「これが僕の最高だよ。バネティーアーカイブ！」

進行方向にあるもの全てを音も無く消し去りながら無色透明の膜が広がってくる。一種のホラーだ。

「黒封陣・全色喰イ」

突如秋坂の前に闇が出現し魔法を喰らい尽くした。秋坂、お前本当に今日まで魔法使ったことが無かったのか？

「あの技を受け止めるなんてね。どうやら僕は君に勝つことはできなそうだね。でも精一杯足止めさせてもらうよ。」

話を聞いてほしいな。

「いいや、もう決着は付いてる。俺の技はまだ終わっていない。」

アリアの技を喰らって闇は急速に膨張しアリアを飲み込んだ。あれ大丈夫なのか？

「おい、秋坂！」

「大丈夫だって。ほら、」

その言葉と共に闇は薄まって消えた。アリアは無事なようだった。

「この技は魔力を食うんだね。いいよ、魔族。殺しなよ。」

殺すなんてそんな物騒な。

「いや殺さないから、道が聞きたいだけで。」

「死んでも魔族なんかに言うもんか！」

「いや、俺達魔族じゃないし。」

「その魔力で魔族じゃないわけない。」

秋坂苦労してんな。

「部屋にいないと思ったら、ソウスケ、アキザカそれにアリアまで何しているんですか！」

シエルディアが来た。しかも機嫌が悪そうである。だから部屋で待とうと言ったのに。

「シエルディアちゃん、いい所に来てくれた。こいつに説明してやってくれ。」

「あれ、シエルディア様何でこいつ等の名を？」

「まずは私にいったい何がどうなったか説明してくれませんか？」
俺は一通りの事と顛末をシエルディアに教え、シエルディアにアリアの誤解を解いて貰い、秋坂は魔法で城の損壊した部分を直した。何気にもう魔法を使いこなしてるし。

「私は今怒っています。二人を呼びに言ったら勝手にいなくなっていて、しばらくしたら破壊音が聞こえてくるし、ものすごく心配したんです。」

「ごめんなさい。」と声をそろえて謝りました。だって目が怖い。何か闇が見えたよ。

「アリアもですよ。一人で先走っていきなり魔法攻撃で殲滅しようとするなんてそれでも師団長ですか！」

「ごめんなさい。」とアリアも謝っている。

「えっと、所で何のようだったんだ？」

ちよっと話題をそらしてみる。

「ああっ、そうでした。こんなことをしている場合じゃないです。父上が二人を呼んでいますので早く来てください。」

話題そらすの成功。でもこういうのは下っ端に頼めばいいんじゃないか、何故姫自ら？

「さあ、いよいよ王様と会うことになった俺達だがこの先どのような困難が待ち受けているのだろう？しかしどのような困難が待ち

受けていたとしてもこの俺が打ち破る！
途中から台詞にするんじゃない。

第一章・第五部・気合さえあれば何とかなるだよお！！（後書き）

いきなりですが、更新スピードを少し落とします。じゃないと私死んでしまいます。今日睡眠不足で歩きながら寝てて危うく階段から転げ落ちそうでした。永久に更新できなくなるより、少し更新スピード落としたほうがいいよね。

具体的には何日落とすと決めていませんが、そろそろ王都にも来たし頃合かなと考えていたので。

それとなんか今回はえらい名前を考えました。魔法は英語使ったんですがどうでしょう？

御感想、御要望お待ちしております。

第一章・第六部・キャラが増えると会話がやり難い（前書き）

予定より二日遅れました。 死んだと思いました？生きてますよ、まだ……

来月の二日ぐらいまでは色々忙しいので投稿スピードが遅くなりがちになると思います。

第一章・第六部・キャラが増えると会話がやり難い

俺達は謁見の間に向かつて現在廊下を移動中である。

この辺りは主要な通路でもあるのか蠟燭……ではなく照明用の魔導具とかそんな感じのものであるう物で照らされている。燃料は魔石とかかな？

「で、何でアリアも一緒に来ているんだ？」

俺の疑問に、今まで黙っていた見かけ十二、三歳に見える僕っ娘は赤色の瞳を好奇心で瞬かせはきとした声で答えた。

「僕、異世界人なんて初めて会ったんだよ。知的好奇心がうずいちやつて。」

要するに宇宙人に興味を示しているようなもんか。

俺は別にオカルト懷疑主義者なんかじゃないが宇宙人が仮に捕まったと聞いていたとしても見に行かないだろう。興味を持ってもせいぜい写真で見て満足するレベルだ。

宇宙人なんかに関わってもろくなことになる。今はなおの事だが、昔からそう思っている。

「アリアは師団長ですから謁見の時に参列していてもおかしくないです。アリアの言ったことを撤回させるのには並々ならない苦労がいることなのでこの際いいでしょう。」

と律儀に説明してくれたのはもちろんシエルディアである。

「所で本当に君達は今日まで魔法を使ったことが無かったの？」
存在をしていないものは使うことができないだろう。そもそも魔法を信じていたのは遙か昔、俺がまだ五歳の頃の話だ。

それからはずっと剣一筋だったし、片時も自分はもしかしたら魔法が使えるかもなんて思ったことは無い。

「無いと言ったら無いけど、魔法に似た感覚の気って奴なら俺は

使っていたぜ。」

まあ、秋坂なら何を可能にしてもおかしくは無い。秋坂はテストで平均点を取ることはできなくても正義のヒーロ本気モードなら腕一本で乗用車を吹き飛ばすぐらいのことはできていたのだ。

今更魔法を一日で使いこなしていたからといって驚くことは無い。があいにく他の二人はそうはいかない様だ。

「まさかこの僕が異世界人とはいえ魔法を使ったことも無いような奴に負けるなんて。」

と落ち込むのはアリアで

「アリアが魔法でアルデシユア將軍以外に負けた所を見たのは初めてですよ。アキザ力は何かおかしいです。」

と感嘆と呆れが混ざった声を漏らすのはシエルディアである。

そうして右に三回、左に四回、階段を一つ下りて―以下省略―でようやく謁見の間前に着いた。

ここでアリアとシエルディアは分かれて行ってしまった。ここは謁見に来る用のいわゆる訪問者の入り口らしい。

でかい扉だ。

この分厚い木戸一枚隔てて、玉座まで続く長い赤い絨毯が敷かれ両脇には城の兵士が立っていると言いついかにも勇者が呼び出されて魔王退治を王から押し付けられそうな光景が広がっているかどうか知らないが俺のゲーム知識から言えばそういう部屋が広がっていることになる。

そんなでかい扉が脇に控えていた兵士つばい人によつていよいよ開け放たれた。珍しく秋坂も無言で見守っている。

そうして表れた光景はまさに魔王退治を押し付けられそうなものだった。

結構先に豪華な赤いすが二つ並んで鎮座されその上には王と王妃であろう人が座っていた。そしていかにも金金の刺繍が施された赤い絨毯が入り口から玉座まで緑つばい高級そうな石のタイルの上に敷かれていた。

おまけに天井に六つ、廊下の照明と同じ仕組みで光っているので、あろう巨大なシャンデリアがぶら下げてあった。おかげで室内は異様に明るい。

部屋の両側に控えるのは恐らく位の高い武官とか、文官とか、近衛隊の皆さん達であろう。その数二十名ほど、夜だからか？

今更だが、何をすればいいんだ。入り口で王に跪いたりすればいいのか、それとも玉座まで歩けばいいのだろうか？

そもそも謁見って普通こっちが待って王が入出するとかがパターンだろ。

なのになんで俺達が待たせた感じになってんだ。

そういえば秋坂の所為だったな。もし何か罰があったら秋坂に全部押し付けて逃亡しよう。

赤い絨毯の意味って何？これって上を歩く者に敬意をもってとかじゃないの。王とかの通り道に敷くんじゃない？本当に俺達が歩いていいものなのか？

さまざまな疑問に倒錯しながらも秋坂が歩き出したのに合わせ俺もぎこちなく歩を進めた。

王の玉座から適当な距離を取るとなんとなく跪いたほうがいいのかなんて思って跪いてみた。

「別にそのような礼を取らなくてもいい。頭を上げてくれ。」

なんとなく王らしくない口ぶりだと思いながらも頭を上げた。王はシエルディアと同じ金髪と碧眼を持った以外にも若々しい男性だった。シエルディアの年を考えると三十代を下回ることには無いと思うのだが十代にも見間違えそうなほど若々しい。それから顔もかなりいい。

同じく王妃様のほうも金髪に碧眼を持ちシエルディアから幼さを抜いた感じの人で、十代でも三十代でも通用しそうな年齢不詳の美人だった。

「本来ならば同じ目線で礼を言いたいのだが私の立場もあるゆえ勘弁してほしい。それと私の部下が手違いで君達を襲ったとも聞い

た、申し訳ない。後で言い聞かせておく。それで娘を救っていただいた件だが礼の内容については後で伝えるのでこの場では言葉だけ、ありがとう。以上、解散！」

全然イメージしていたような内容と違った。もっと厳格で偉そうな感じかなと思っていたので拍子抜けだった。

何人かを残して部屋から兵士達が退場した時、王妃様が突然笑い出した。

「ふふふ、アウスもっと王らしい態度は取れないの？」

「わ、笑わなくてもいいだろ。それでもかなり頑張ったほうなんだから。」

頭がついていかない。つまりどういう事？と思っていたのが顔に出ていたのだろうか。

二人は玉座から立ちこちらの方に近づいて来た。

「この人、口べたって言うか、小心者って言うか畏まって話すのが苦手なのよ。」

「はあ、そうなんですか。」

王様らしくないと思ったのはその所為か。その時、部屋に残っていた一人。白髪まじりの黒髪の男が俺達の方に近づいて来た。帯剣してない所を見ると文官かなんかだろう。

「陛下！あれほどもっと王らしく振舞ってくださいと申し上げたではありませんかっ！」

なんだか知らないが凄く怒っている。

「し、シード落ち着いて。僕も頑張ったんだってば、それなりに。」

「もっと真剣にやってください、真剣に！そもそも最後の『以上、解散！』は無いでしょ！」

俺は王様をもの凄く身近に感じる事ができた。王様も大変だな。

「シードさんとお父様は何か催しが終わるたびに何時もあぁなんですよ。」

シエルディアいつの間に！

あの親があつてこういう謙虚な娘が生まれるわけか。だとすると前の黒い部分が出てきた時とかのはもしやお母様からの遺伝？

それからしばらく、シードさんと王様の攻防は続き、最後はシードさんがもう一度最初から特訓をしようということに丸く収まった。

「僕はアウス・アラノア・レイフィード一応この国の王様を……」

「おほんつ。」

「一応無しね。王様をやつてゐる。これでいんだろシード。それでまあこのしゃべり方は生まれついたものが抜けなくてね、普段は王の威厳とかもあるからここにいるメンバー以外と居る時は変な風に話すが気にしないでくれ。人がいなければ別に敬語とか使つてくれなくてもいいからね。」

「了解。」

と秋坂は敬礼しているのだがこの世界にも敬礼つてあるのかどうなのか。師団とかそういう単位があるつてことは敬礼もありそうなものだけだな。

「分かりましたが、俺は基本的に年上には形だけでも敬語を使うと決めているのでこれでしゃべります。」

「しゃべり易いのでいいよ。年上かあ、僕これでも三十一だけど首脳陣の中では一番若かったりするんだよね。シードは五十七でしょ、アルなんて百三十七歳だし。エルフ族つて凄いな。つて言つても誰かわからないよね。この黒髪の不機嫌そうな顔しているおじさんがシードで向こうの見かけ二十ぐらいの美青年がアルデシユア、愛称アルつて言うんだよ。」

王様も外見から三十一歳とはとても思えない風貌なのだが、アルデシユアさん百三十七歳つて言うのは驚きだ。とてもじゃないが見えないな。さすがファンタジーだね。

アルデシユアさんは銀髪碧眼で耳が長いという想像通りの美形の青年だった。想像できるというのは見て一発でエルフつて分かるということだ。

「宰相のシード・サハルイ・ハーブルと申します。見ての通りこ

の地の出身ではないのですが先王よりこの位と爵位を賜りこの国に仕えさせて頂いています。」

宰相つて王を抜いたら政務のトップじゃないか。ものすさまじく偉い人だったんだなシードさんつて。

「陛下より紹介いただいた大將軍のアルデシユア・ノーデンハーバ―だ。三代前の王より招かれてこの国に来た。首脳陣の中では一番の古株になる。呼ぶ時はアルで構わない。」

で武官のトップもか。師団長という呼び方と大將軍という呼び方が混在しているのは少し妙だが異世界なんてこんなもんだろと思わなくもない。

「私の紹介はしてくれないの？」

「ごめんごめん。こちらは僕の妻のラルミア・ルール・レイフィード。」

「と言うことでラルミアよ。娘を救ってくれてありがとう。娘から話は聞いたわソウスケさんとアキザカさん。」

「僕からお礼を言わせてもらうよ。本当にありがとう、もし君達がいなかったらと思うと……いや、こういうことは考えない方がいいね。」

俺はなんだかこの王様が好きになれそうだった。

「いや、そんなお礼をして貰うほどのことをした訳でもないのですが……」

本当に俺は何もしていない。いや、秋坂の攻撃からシエルディアを救ったのは確かだがそれはプラマイゼロだろう。

秋坂は……セオリーを守っただけだろうな。

「いや、君達には僕達の気がすむまでお礼をさせて貰うつもりだよ。娘の命より大事なものはこの国ぐらいのものだよ……いや、いざとなったら娘を優先させるかも知れないな。」

「陛下さすがにそれは」

シードさんのツツコミ。でもまあ国より娘を優先させる王なんて最悪だよな。

「いや分かつてる。でも気持ちの問題だよ。」

「あら、アウス私はシエルディアより大事じゃないって言うの？」
ラルミアさんのツツコミ。そこを突かれると王様厳しいでしょ。」

「ラルちゃんまで手厳しいな。でも夫婦愛と親子愛は別物だよ。本当の意味で一番愛しているのはもちろんラルちゃんだよ。でも一番大事なのは娘だつて気持ちも君には分かるだろ？君は僕を残して先には行かないって信じてるからね、心配は無用なんだよ。」

「昔はもうちよつといじり易かったのに、なかなか成長したわね。」

「いやあ、君が鍛えてくれたからね。さすがに王様になつても昔の調子じゃあかつこ悪いよね。」

仲のよさそうな夫婦で何よりだ。所でさっきからシエルディアとアルデシュア将軍が黙りっぱなしなんだけど何かあつたのだろうか？

「何でさっきから黙ってたんだ。」

もちろんこの問いはシエルディアに向けたものだ。俺にはあの超然と立ち尽くしている大將軍に話しかける勇氣はない。

「お父様とお母様の絡みに巻き込まれると厄介なんですよ。黙っているに限ります。」

なるほどね。

「そういえば僕は話を聞いていたからすっかり君達の紹介が済んでいたと思っていたけど、アルとシードにはまだだったね。」

「そうでした。俺は倉羽 宗助で俺の国では名前が後に来るので宗助が名前になります。好きに呼んでください。一応、異世界人ですね。他に紹介することはありませんね。」

「俺の名前は秋坂 光輝。同じく異世界人。喧嘩では負けたことはないな。よろしく。」

こいつに礼儀を叩き込んでみたい。俺もそこまでちゃんとしてる訳ではないがな。アルデシュア将軍が『喧嘩で負けたことがない』で何故か反応したような気がしたが、気のせいかもしれない。

「こちらこそよろしく願います。」

「よろしく頼む……」

アルデシユア將軍視線が怖いです。

「皆の紹介も済んだし、予定が無いならとりあえず君達にはしばらく王宮に滞在してもらおう。費用なんかは心配してくれなくてもいいよ。希望があったら何でも言ってくれ。では、今日は遅いのでまた明日。寝具は誰かに用意させるよ。」

「はい、ありがとうございます。」

とりあえず行く宛てが無いしやっかいになるしかあるまい。その内何か仕事が無いか聞いてみよう。ただ飯ぐらいは気がとがめるし。「留年まで残り八十九日。果たして王都ではこれからどんなことが待ち受けているのであろうか？」

待ち受けてるんじゃないくて、お前が勝手に突っ込んで行くだけだろ。

第一章・第六部・キャラが増えると会話がやり難い（後書き）

眠いです。寝不足です。えらい間あけた割には書置きとかありませんし、少ない分量で早く更新するのが目標だったのに。でもとりあえず一週間あけることは無いというのは守れました。パソコンの機嫌も直りましたし、仕事が終わればまさに順風満帆ですね。

第一章・第七部・目覚めは美女のキスを添えて（前書き）

さて、私は最近この話が何処に向かっていくのか分からなくなりつつありましたが、コメディーかシリアスな内容なのかホント中途半端な感じだったんですけど、ようやく分かりました。私が書きたかったのはファンタジーなのですね。と言うことで軌道修正のつもりで書いていたら何故かこんなことに……

再び書く気がなかったのという話です。どうぞ

第一章・第七部・目覚めは美女のキスを添えて

目が覚めると知らない天井だったと言うのは良くあるが、全く知らない世界だったというのはどうなのだろう。いや、今いるのは異世界の王宮の一室だということは理解している。

俺は異世界に来た。なのだが今現在いるのはさらに意味の分らない場所だった。あたり一面俺の胸の辺りまである背の高い深緑の草で覆われていた。空に輝くのは水色をした星のようなもので、空自体は黒いというより深みのある青色をしていた。

周りを見渡して見るがこの世界は球ではなく平面なのではないかと思うほど四方を見渡しても背の高い草が広がっているだけで果てが見えない。あるいは本当に平面なのかも知れない。異世界だし。

異世界に迷い込んだ上にさらに別の異世界に迷い込むなんて聞いたことない。

あはははははははは、笑ってる場合じゃねえ。

いかにこうなったかと言うと寝て起きたらこうなったのだ。俺の所為ではない。

これはもしかしてあれだろうか、夢オチとか言う。だったらついでに今までの出来事ごと元の世界のベットの上で見た夢という事にしてほしい。でも、その場合もしかして俺は寝過ごして夢を見ているのではないだろうか。そうだとするとこのままいくと学校に遅れてしまうことになる。

「どちらにしても早く起きないとやばいか……」

思わず呟いた独白は突然吹いた風にさらわれて——妙なフレーズだ。普段ならこんなことを思ったりもしない。ここの雰囲気は毒されたか？

また一陣の風が来る。しかし背の高い草をなびかせて近づいてきた風は俺に届くことなく止んだ。

風の終着点にその女性は突然現れたのだ。神秘的な雰囲気を漂わせる彼女だったが、特に特徴的なのはその髪である。風に吹かれるようになびくその長い髪は光の加減が緑から深い青などと色を変えていき最後には空気に溶け込むように透明感を増し消えていた。

「誰だ？」

「この領域は私の物。サモナー訪問者が私の名を聞くのか？」

顔は無表情だったが深緑の瞳には敵意が込められているような気がする。

「コンタクトの許可はしなかったのに、この時代に強制同調を使える奴がいるとはな。人間如何なる手を使った？」

『いや、さっぱり分からないのだが。』なんていつても通じそうにないよな。でも知らない物は知らん。

「えっと、気づいたらここに居たんだが？」

しばらく彼女は押し黙ってこちらを眺めていた。視線が妙に厳しい。

「妙だな、お前嘘をついていないな。まさか、アンコンシヤサモナーだとも言うのか？今だかつてこの領域まで来れたサモナーは例外なく神器を使っていたというのに。」

今度は眉根を寄せ明らかに困惑の表情を見せていたが目からは警戒の色が消えていない。

「いやよく分からないが、気がついたらこの世界に入り込んでいて、どうやったら帰れるんだ？」

「サモナーが私とコンタクトを取りながら帰りたいだと、本気で言ってるのか？」

帰りたくないなんて誰が思うんだよ。心の底から帰りたい。自分の部屋のベットの上で目覚めたい。

「いや、いたってシリアスに聞いている。」

といったら堪えられないという感じでいきなり爆笑された。何か

変な事言ったか？

「そんなこと言ったのはお前が初めてだ。それに本当に私のことも知らないようだな。おかしい人間だが、気に入ったぞ。」

それは良かった。敵意の視線も消えて表情も柔らかくなっている。一時はどうなるかと思ったな。

「結局お前は誰なんだ？」

「名を聞くなら自分から名乗るのが礼儀だ、がまあいいか。私は神の炉より生まれ、起源より来たる晨風。風の最上位精霊にして世界の根源の一角を担う風霊シエルラ・ミオデ。ようするに精霊だ。」

これは寝ている間に精霊界まで迷い込んでしまったとかそういうオチなのか、何てありきたりな。

「俺も名乗った方がいいのだろうか？」

「その必要は無い。擬似的ながら同調を済ませた。」

同調が何かは知らないが、とりあえず必要が無いと言われれば話すことは無い。問題はどうすれば帰れるかな。

「帰りたいのなら私と契約しないと無理だぞ、多分。」

心が読まれたぐらいで動揺はしない。相手は精霊だ、それぐらいのこと可能だろ。問題は帰れないということなのだがどういう事だ？

「異世界人なら事情を知らなくても当然だろうが、この領域は精霊界の中でもかなり深遠な領域在る。それゆえ魔力の密度もとんでもなく濃いのだ。」

それで話は変わるがお前は精神体だけでこの領域に来ている。決まった形を待たず変容的な精神体であることもふまえお前は精神力が神格並みに強いので強大な魔力の中でも自己を保っていられる訳だが、精神体であるがゆえに魔力の吸収量がいつもより大幅に上がっているんだな。そして体が無い以上魔力の上限は精神力に比例する。今現在お前は人間の体が耐え切れる限界を超えて魔力を溜め込んでいる。そのまま戻れば確実に身体が崩壊するだろうな。人間のくせに大したものだ。」

いきなり死刑宣告かよ！ということは俺はこのままこの世界にと

どまらなければならぬのか？

「その選択もできる。それほどの精神力があれば精霊として生きることが可能だ、それかなり高レベルな精霊に成れるだろう。だが、どうしてもというのなら帰れないことも無い。もちろん宗助の本来の世界ということではなく、お前の体が現在ある世界へという意味だが。」

とりあえず安心した。そうするには如何したらいい？

「私と契約することが必要だ。宗助の精神体と完全に同調することができれば、精神体の一部が私と繋がっている事になるので魔力のキャパシティーは私の魔力キャパシティー分増大する。」

なるほど契約か、しかし契約というと双方の合意が必要なんだろう？
少なくとも俺の知識では一方的に結ぶことは無理だと記憶してる。
力を貸す代わりに魂寄越せみたいだな。それは悪魔か。

「宗助が合意さえすれば問題は無い。ただ条件が一つ」
条件か、まあ仕方ない。何だ？

「私と契約を結んでいる間は何があっても生きる。」

そんな条件ってありなのか、俺は死ぬ気は無いぞ。

「お前はまだ過去の事件を引きずっている。生きる理由を見失っている。私にはそう思えたが」

もしかしてお前は俺の過去を視たのか？

「そうだ、その上でお前を気に入った。他人のために生きる人間などめつたにいない。」

そんなんじゃない。他人なんてどうでもいい、俺はあいつのために生きていただけだ。そして俺はあいつを守れなかった。

「記憶を視た限りそうは思えなかった。それにお前にあの死はどうしようもなかっただろう。」

「そういうことを言っているんじゃない。俺はあいつのために最強を目指した。あいつは俺の生きる意味だった。どうしようもないで済ませていいことじゃない。」

「そのための契約だ。もう一度お前が剣を取る理由をこの世界で

見つける。」

「条件が増えてるぞ。」

「生きる理由を見つけるといつている。何のために生きているのか分からないようじゃあ死んでいるのと一緒にだからな。」

酷い言われようだな、俺はちゃんと生きているつもりだ。

「確かにあいつが死んで何もかもがめんどくさくなったのは確かだが、剣を捨てた時過去も共に捨てた。俺は生きる理由が無いが死ぬ気は無いぞ。むしろ俺は生きたいと願っている。」

「それは彼女との約束があるからだ、違うか？」

まるつきり図星を突いてきやがる。あんな昔の約束を律儀に守っている俺は確かにまだ過去を捨て切れてないのかもしれない。

「確かにその通りだ。だが、そうだからと言ってもう一度剣を取る約束はできない。契約は無理そうだな。」

「そんなことは無いぞ。契約は結んでやる。」

どうということだ？

「どうせ言っても聞かないことを言ってみたただけだ。お前がこの世界に溶けて消えるのは私の本意ではない。だから協力してやろうというだけだ。」

「それはどういう……」

最後まで言い切る前に口を塞がれた。一瞬どういうことか事態が掴めなかったが、どうやら抱き疲れているらしい感触と目の前にさつきまで話していた人物の顔があったことから把握した。何処までこの世界はお約束を守れば気が済むのだろうか？

俺の顔は真っ赤に染まっているに違いない。俺は女性に興味がないと学校の一部では噂されていたらしいが逆に意識しすぎて女性を避けているだけなのだ。つまりこういうことに関しては全くといっていいほど免疫が無い。

「あっえ、う」

どうやら動揺しまくってるらしい。動悸も激しいし、何より顔どころか体中が熱くなっていることができることなら千里彼方まで走り去り

たかったのだが体が麻痺したみたいに動かない。その上腰が抜けたみたいにへたり込んでいて全く我ながらかつこ悪いよな。

「契約完了。言っておくが初めてなんだぞ。今までここまで気に入った相手はいなかったからな。宗助を死なせはしない。また会おう。」

そこで一度視界が黒く染まり再び明るくなると見慣れた訳ではないが昨日見た天井が見えた。

「夢……か？」

個人的に言えばさっきのは夢であってほしい。だが自分がそんな夢を視てしまったのだとしたらそれはそれで落ち込む。かといって現実というのも色々と困る。

「どうしたものだろつか？」

誰もいない部屋なのだから何も返って来ないのがあたりまえ……

『全て現実だ。』

じゃ無かった。

（やっぱりそうだな。あれで夢なわけないよな。）

『無事身体に帰れてよかったな。』

やっぱり心の中で会話できるんだな。

（無事に帰れないことってあるのか？）

『成功確立は二十パーセントも無かった。』

五分の一以下、低すぎない。

（今更それ言うのかよ！）

『死なせないといったはずだ。何事も結果オーライ、過去のことをいっいち気にするな。』

（秋坂みたいな言い方するな。）

『何、あの単細胞生物と最上位精霊の私と一緒にするなんて酷い侮辱だぞ。』

秋坂、お前の名前は酷い侮辱用語らしいぞ。もしかしたら放禁かもな。

「今、何時だ？」

『大体、五時半だな。』

元の世界での習慣はなかなか抜けないものだな、いつも起きる時間だ。

「俺は何をしたらいいだろうか？」

朝食に呼ばれるにしてもまだ時間があるだろう。とりあえず着替えようか。

着替えるのは昨日用意してもらったこっちの世界の普段着である。最初はもつと畏まった物を用意されたのだが、趣味じゃない上に高価そうだったので遠慮した。

『宗助、何か聞きたい事は無いのか？』

（めんどくさいから無い。けど強いて言うなら呼び方だな、シエル・ミオデって呼びにくいからシエルでいいか？）

『別に私は構わないぞ。』

（そういえば聞きたいことといえば元の世界に帰る方法は知らないか？）

これで分かれば簡単なんだけどな。

『知らないな。』

それは残念。

『それと実はちょっと用事ができたのでしばらくコンタクトが取れそうにない。無事を確認できたし一回コンタクトを切るぞ。』

（了解。）

秋坂じゃないがちょっと散歩でもしてくるかな。暇だし。

第一章・第七部・目覚めは美女のキスを添えて（後書き）

副題でだいたいのりが分かった方もいたんじゃないでしょうか？
本当に中途半端な感じですね。でもあれですもの。あやふや
なることって言うのが私の売りなんですから仕方ありません。予定
としてはあと三話ぐらいで王都を出れると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2528i/>

時限突破旅行伝

2010年10月10日12時32分発行